

熊野古道

みちのくま記

7

木綿の産地だった泉大津

絵と文・熱田親憲

題字・熱田秦華

泉大津市はかつての代から始まり、江戸時代にかけて盛んになった。特に泉州(堺、熊取)が大産地となった理由は①

木綿栽培の歴史は、種が中国から輸入された室町・安土桃山時代の漁肥が豊富②木綿

は麻より保温性が高く、絹より多量に生産できる③摂津(大坂)という一大消費地が控えていた④土地の水はけがよい——などの条件がそろったことによる。

木綿栽培の最盛期(18世紀)は、田んぼに織に関わっていた。当所帯中206所帯が綿織中心の生産が続き、戦後は多様化が進んだ。

板原町にあるアップデイトな織物メーカーの深喜毛織本社工場を訪ねた。1887年創業の毛織物一貫生産の工場で、現在はカシミヤ服地の反物がメイン製品である。

現場に入って、原毛のわたづくり、カード

「毛」を最高品質の服地に仕上げる起毛工程で、量産用の金属起毛ではなく、植物材のチーゼル草を使用して、自然素材には自然のものという経営感覚は大したものである。デジタル管理とアナログ技術をミックスさせる経営戦略に感服した。

紡織の神への信仰今も

の半分が稲作、半分が然、加工・集荷の中心だ。

織編館の説明員はこ

織編館の説明員はここまで毛布生産を支えてきた技術は、起毛作業工程(チーゼル草、針布)と紋紙(パンチカード)を用いた自動織機だと胸を張って結んでくれた。

クリーンな工程の中で、ウールピンの中で汚れのないわたが綿雪のようにゆっくり降るさまを見ると、木綿畑にいたような気持ちよさを覚えた。

炎天下チーゼル草の爪立ちぬ 秦華

(次回は6月27日掲載予定)



(上から時計回りに) 泉穴師神社、織編館、深喜毛織にて(泉大津市)

最後に豊中町の泉穴師神社を訪ねた。社殿大修理のための寄進者に織物業者と思われる幡奉賛会140社の掲示があり、紡織の神・袴幡千々姫命への信仰が今なお健在なことを知った。泉州の毛織産業の将来はまだ明るいと感じた。